

Ⅲ. 「地域復興と福島ならではの学び：哲学的・事例研究の観点から」

1. 背景と内容

2011年3.11以後、13年が経過していますが、復興はいまだに進行中です。被災地の生活インフラや交通、住宅といったハード面は整いつつありますが、地域の生活空間の構成するソフトウェア的なものはまだまだ道半ばと言えるでしょう。震災から10年以上が経過し、ようやく復興の本質的な議論が本格化しています。「復興」という言葉は、政府、自治体、地域住民、学者、地域のNPOなどによってさまざまな意味で使用されています。政府の復興ガイドラインでは、震災以前の状況へ戻るという意味で使われており、復興庁の名称は英語で「Agency for Reconstruction」と表記されています。このReconstructionという言葉は「再建」という意味で理解されています。一方、自治体では「Disaster recovery」（災害復旧）という言葉で復興を表現しすることが多いです。さらに「復元」（restoration）や「復活」（revival）といった言葉も使われ、これらの表現はいずれも災害以前の状況へ復旧をイメージさせます。復興が単なる原状回復にとどまるのかという疑問が残るところです。

「復興」を「治癒」（healing）や「再生」（regeneration）、「再誕生」（Re-born）という言葉で表現することもあります。「治癒」はインフラ・ハードウェアの復旧だけでなく、心理や人間本質の回復も含んでいます。「再生」は一見消極的な意味にも捉えられますが、新しい状況への積極的な再構築という意味も持っています。

被災地の住民は、震災前の状況への単なる復元ではなく、より進化した創造的な「新たな創造と変革」（New Transformation and New Creation）を目指しているかもしれません。このように「復興」という言葉の意味を積極的な方向へ拡張することは、被災地の未来を考える上でとても重要です。未来のビジョンや目標、さらには地域が必要とする人材像にも大きな影響を与えるでしょう。

被災地における教育や人材育成は、復興の内容や未来のビジョンと深く関連しています。福島が抱えるさまざまな課題は、地域が保有している人的・物的な資源や技術で解決するしかありません。資源が限られている福島では新しい技術を活用することが有効な手段となるでしょう。「福島ならではの学び」は、福島が描く復興の内容と連携するものです。したがって、「福島ならではの学び」の意味を定義することは、「復興」という言葉が地域や時代ごとに持つ哲学的な意味を議論する必要があると言えます。また、グローバル社会で震災の事例を考察し、それと照らし合わせた形で定義していく必要もあります。この研究は、地域マネジメント学科が目指している「福島ならではの学び」の到達目標や内容、方法論、実践方法などを探求するものです。